

## 研究主題「よりよく読み手に伝わるように意識しながら、

まとまりのある文章を英語で書くことができる生徒の育成

－生徒が学び合いながら推敲する過程を通して－

東京都教職員研修センター研修部教育開発課

杉並区立向陽中学校 主任教諭 鈴木 美帆

### 第1 研究のねらい

中学校学習指導要領（平成29年3月告示）では、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、各教科等における見方・考え方を働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要であると示されている。外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方は、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」である。コミュニケーションを行う目的や場面、状況等（以下、「目的・場面・状況等」と表記。）に応じて、伝える内容や表現を調整することや、文と文の順序や相互の関連に注意を払いながら、まとまりのある内容を表現することは、現在の翻訳機にはできない。翻訳機が普及している現代だからこそ、翻訳機にはできない技能の育成が必要だと考える。本研究では、生徒が思考を整理しながら、自分の文章と向き合う時間を十分確保できるように、「書くこと」の指導に焦点を当てる。生徒同士で文章を読み合ったり、自身で推敲したりする活動を通し、目的・場面・状況等に応じて、読み手に伝わるように意識しながら、表現することができる生徒の育成を目指す。

### 第2 研究仮説

生徒が学び合いながら推敲する過程を工夫することで、生徒が読み手を意識して、伝える内容や表現を考えながらまとまりのある文章を書く力を高めることができるだろう。

### 第3 研究の内容と方法

#### 1 基礎研究

##### (1) 国語科における「書くこと」の指導事項を取り入れた指導の工夫

小学校学習指導要領解説国語編（平成29年7月）と中学校学習指導要領解説国語編（平成29年7月）を参考に、推敲に必要な観点を分析した。指導に当たっては、生徒自身が間違いなどを正したり、よりよい表現に書き直したりする活動を通して、徐々に文章が整っていくことを実感できるように、自身が書き上げた文章を比べられるようにする。

##### (2) 読み手に伝わるように意識しながら、まとまりのある文章を書くための推敲の視点

本研究における「まとまりのある文章」は、「70から100語程度で、文と文の順序や相互の関連に注意を払い、全体として一貫性のある文章」とする。また、読み手を意識して書くための推敲の視点は、右に示すとおりを設定した（表1）。

表1 読み手を意識して書くための推敲の視点

- ・書く相手や目的に応じた語彙・表現を用いている。
- ・意見と事実を分けている。
- ・相手の感情や気持ちに配慮した表現を取り入れている。
- ・相手のもっている知識や関心に応じた構成になっている（詳しく書く必要がある場合、簡単に書いた方が効果的である場合などを判断している等）。
- ・断定、推量などの助動詞を用いた表現や、動詞の使い方（時制・受け身など）が適切である。

## 2 調査研究

「生徒が学び合いながら推敲する過程」の有効性を検証するため、都内公立中学校1校の第3学年に在籍する生徒93人を対象に、実際に英文を書く「技能に関する調査」と、まとまりのある文章を書くことに関する「意識調査」を実施した。また、都内公立中学校23校（小中一貫教育校含む）に所属する英語科教員39人を対象に、まとまりのある文章を書くことの指導における取組状況を調査した。

### (1) 生徒対象調査（令和4年7月）

「技能に関する調査」は、「日本について詳しく知らない外国からの転入生に、自分の好きなことが伝わるように自己紹介カードを書く。」

という場面設定で行い、「日本につ

いて詳しく知らない外国からの転入生」への配慮が見られる英文になっているか、という視点で評価した（図1）。「技能に関する調査」及び「意識調査」を関連付けた結果、以下に示すような生徒の実態が明らかになった。

ア 読み手に配慮した文章を書くことができた生徒は52.7%であった。

イ 「目的・場面・状況等を考えて書いている。」という「意識調査」の項目に、肯定的に回答した生徒は75.3%であった。その中で、技能として表現できた生徒は60.0%であった。

ウ 相互の関連に注意を払い、全体として一貫性のある文章を書くために、文と文のつなぎ方を意識することは大切である。しかし、「文と文のつなぎ方を工夫して書いている。」と肯定的に回答した生徒は57.0%であった。



図1 「読み手への配慮」に関する評価について

### (2) 教員対象調査（令和4年8月）

まとまりのある文章を書くことの指導における課題として、「添削に費やす労力と時間が十分にとれないこと」「日本語でも書く内容を考えられない生徒が多く、構成を指導するのが難しいこと」「苦手な生徒へ指導する時間が十分にとれないこと」が挙げられた。また、授業内で生徒が英文を推敲する学習活動を行っている教員は46.2%にとどまった（図2）。

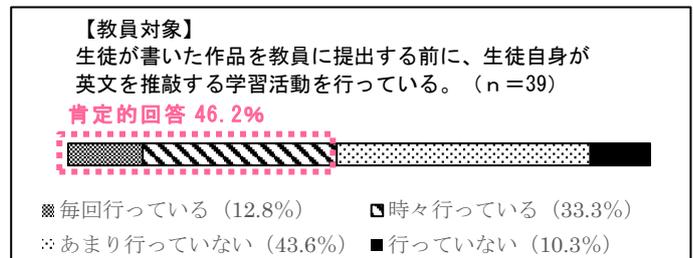


図2 教員対象調査結果

## 3 「生徒が学び合いながら推敲する過程」における指導の工夫

上述した指導における課題を解決するため、段階的な学習活動を設定した（図3）。生徒が



図3 段階的な学習活動



図4 生徒の推敲の過程

学び合いながら推敲する過程は、Step 2に含まれる。本研究における推敲の過程は、情報やキーワード、順序などの構成を練る段階から、提出する直前まで行われている(図4)。そして、Step 2における授業の流れ(表2)の中で、次の3点の工夫を実践した。

表2 Step2「文章を書く。」における授業の流れ

書く目的・場面・状況等の確認	50
学び合いシートの配布	↓
・教員が示す観点の確認 ・生徒自身で振り返りの観点を決定	100
メモを基にした文章作成【1st Writing(第1案)完成】	分
ペアでの学び合い(相互評価)	50
やり取りした内容を参考にした推敲【2nd Writing(第2案)完成】	
ペアでの学び合い(相互評価)	
やり取りした内容を参考にした推敲【Final Writing(提出用)完成】	
1st Writingからの修正・変更箇所の振り返り	
↓ 指導者に提出	

(1) 【指導の工夫1】 学び合いシートの活用

学び合いシートは、目的・場面・状況等を確認した後、すぐに配布し、指導者が授業のねらいに沿って決めた観点を伝える。また、指導者が決める観点に加え、生徒自身が目標とする観点を書き込む欄を設けており、生徒が主体的に学習に取り組めるようにしている。学び合いシートを活用することで、学び合いシートに書かれた観点の下、生徒が文章を推敲したり、ペアでコメントを述べ合ったりすることができる。

(2) 【指導の工夫2】 一人1台の学習者用端末の活用

英語で文章を作成する際は、一人1台の学習者用端末を活用する。端末上で文章を作成することで、文の追加や入れ替えが容易になり、英語に苦手意識を抱える生徒も、「書くこと」の学習に取り組みやすくなる。また、スペルチェック機能を活用すれば、生徒自身で綴りの誤りに気付くことができるため、指導者が内容面の添削に費やす時間を確保することができる。一人1台の学習者用端末を活用することで、生徒が自立して学習することができる場面が増えるため、指導者が全体を見て、生徒の学びを支援することができる。

(3) 【指導の工夫3】 1st Writingからの修正・変更箇所を振り返る時間の確保

学習のまとめとして、生徒は修正・変更した箇所を日本語でまとめる。そうすることで、読み手を意識した文章に改善されたことを生徒が実感することができる。生徒は、「1st Writing」「2nd Writing」「Final Writing」「振り返り」の4点を全てデータ上で提出する。指導者は、それらを確認することで、生徒の思考の流れを見取ることができる。

4 検証授業(令和4年10月から11月に実施)

(1) 検証授業の概要

表3 「生徒が学び合いながら推敲する過程」を取り入れた単元指導計画(全10時間)

第1時	教科書を用いた指導	単元学習モデルにおける位置付け	
第2時			
第3時			Step 1 「まとまりよく書く」ために、必要な知識を身に付ける。
第4時			
第5時			
第6時			
第7時			
第8時	事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書く活動	Step 2 文章を書く。 【学び合いながら推敲する】	
第9時	学び合いながら推敲する活動		
第10時	教員の指導を受け、英文を修正する活動 正しい発音で音読できるように練習する活動	Step 3 教員の指導を受け、英文を修正する。 Step 4 正しい発音で音読できるように練習する。	

教科書を用いた指導と、段階的学習活動 Step1 『「まとまりよく書く」』ために必要な知識を身に付ける。」とを組み合わせ、単元指導計画（表3）を作成した。

## (2) 検証授業の結果

内容の構成についてクラスで意見交換する第7時の活動では、指導者が改善点を示さなくても、生徒が主体的に改善点を見付け出すことができた。第8時の文章を書く活動では、オンライン上の翻訳機能を活用しながらも、「この表現をそのまま使ったら難しすぎるから、自分なりに言い換えよう。」と、読み手のことを考え、実践する生徒もいた。学び合いシートに関しては、全体の96.4%の生徒が「より良い文章を書くために、学び合いシートは役立った。」と肯定的に回答している（図5）。また、検証授業後に行った調査においても、生徒の技能や意識を向上させることができた（図6）。「日本について詳しく知らない外国からの転入生に、自分の好きなことが伝わるように自己紹介カードを書く。」という技能に関する調査において、「If you have any questions about Japan or this school, I can answer the questions.」等、配慮が見られる文章を書くことができた生徒が18.3%増えている。

したがって、「生徒が学び合いながら推敲する過程」は有効だったと考える。

## 第4 研究の成果

- ・生徒が学び合いながら推敲する過程を取り入れた指導を通して、生徒が読み手を意識して、伝える内容や表現を考える力が高まった。
- ・学び合いシートを活用することで、生徒の主体的な学びを促すことができた。
- ・一人1台の学習者用端末を活用した指導を工夫することで、英語で書くことに対して苦手意識を抱える生徒も、負担が少なく文章を作成することができた。

## 第5 今後の課題

- ・生徒が文章を書く中で学習した、語彙や表現の定着を図る指導の充実を図る。
- ・何を書いたらよいか分からない生徒を支援するために、書く内容を明確にしていくための手だてや活動を考える。

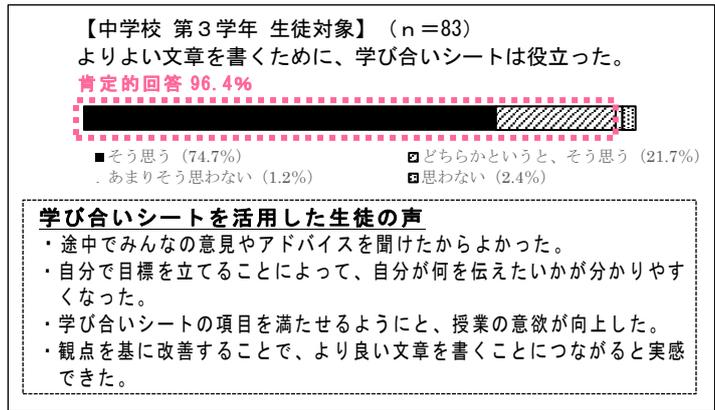


図5 学び合いシートを活用した生徒の感想

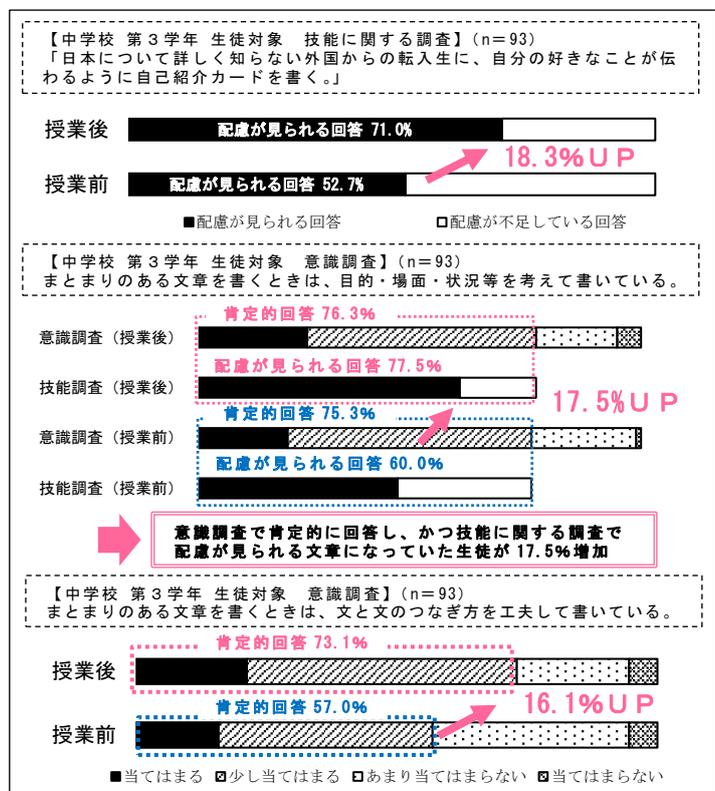


図6 生徒対象調査 結果の変容